

かの港みなとわたのまもりのかたくとも

攻め入らん日はほとやなか覽かん

雨中進軍うちゅうしんぐん

雨降りて暗き夜半にもいくさひと

あたのとりてに進み行くらん

遼陽の占領を祝ひ奉りて

こゝそとて仇の守りしとりてさへ

わかみいくさの物となりなき

秋の夜

東くめ子

病める子のれもわながめてつくくと

秋の長夜をひさわかしつる

和歌三首

湯川たき子

秋田

ゆたかなる稻葉の川中に袖ぬれて

身にしみ渡るあきの夕ぐれ

落葉

ふく風にあわとみだれてこずえより

道もなきまで散る木の葉哉

千鳥

小夜ふけて波に聲そふ浦千鳥

ねさめて聞けば八千代とぞなく

和歌二首

志田なか

なく虫の聲をきいても去年の秋

身まかりましゝ母をしぞ思ふ

きりたちてそことも分ぬ秋の野に

聲さやかに虫のなくなる